

音は音楽か？

音には色々な「情報」が含まれています。時報の音には時間という情報が、踏切の警報には危険という情報という風に環境音には多くの情報が含まれています。マリー・シェーファーの提唱する「サウンドスケープ」は「音風景」と訳されるように、環境音が発する情報を目を閉じていても風景として再現できる行為を指し、これが「音」と「音楽」の微妙な境界線となっています。

確かに環境音には音楽の音や歌声も含まれており、その情報は音楽でなければ伝え得ない情報であることはわかります。このシリーズの「その2」(1993年新年号)で「おならは音楽か？」というタイトルの記事を書いたのは何と14年も前のことだったのですが、自然そのものの音と加工や制御された音の違いについての私の考えを述べたものでした。

この14年間で音楽教育の現場では一つの流行がありました。ゆとり教育や個性化教育の名の下に「創って表現」というタイトルが、各地の研究会のテーマとなっていました。しかも、教師は「教えないで」「支援する」というのも流行しました。基礎・基本を「教えて」こそ個性化や応用が利くという当たり前のことがなござりにされたまま当時の小学生は大人になってしまいました。

彼(女)らは今大学生か新社会人です。確かに学校教育はその間に変化しました。教えられないで、支援されたはずの彼(女)らの音楽的能力や環境はその前の世代とはどう変わったのでしょうか。

ここに面白い調査結果があります。10年前に京都の大熊藤代子先生(現京都市立上高野小学校教諭)が兵庫教育大学の修士論文「戦後の音楽教育の変遷とその効果についての研究」という中で、昭和22年・26年に試案として発表された文部省の学習指導要領が昭和36年に告示され実効力を持って、それ以降ほぼ10年ごとに改訂され現行の平成10年版が施行されるまでの各世代ごとの音楽的能力を追跡調査したものです。

つまりそれぞれの時代にこどもだった今の大人が持っている音楽的能力や態度がそれぞれの時代の音楽教育に起因するという仮説に基づいて、46項目の質問(実音・楽譜を含む)に対するアンケートを小学校の保護者や民間企業の従業員等859人に対して行った興味深い調査でした。

被験者は年代別に昭和13~18年生まれをAグループ、19

~22年をBグループ、23~29年生まれをCグループ、30~39年生まれをDグループ、40~48年生まれをEグループ、49~56年生まれをFグループというようにそれぞれ異なる指導要領で教育を受けた世代に分類しました。この分類は音楽産業の顧客の分類にも使えると思うのですが、どうでしょう。

音程や和声感についてはEグループが優れており、旋律記憶の能力ではCよりDが優れ、他のパートにつられずに歌う能力はAが一番高い。器楽演奏については、Dグループを頂点として、それ以外のグループはピラミッド型に下がります。鑑賞の能力では、確実にグループ間の有意差が存在し、特に知識面ではAがトップで以下右下がりに成績が下がる。これは楽譜や記号の理解では一層その差が開き、AからFに向けて急激に下降します。

しかし、読譜力となればDがトップとなります。また、習った曲をどれくらい憶えているかという点でも、若い年代ほど劣ります。教師からの影響では、ダントツにAが突出し、Dがどん底となります。現在の日常生活における音楽的経験は僅差ではありますが、グループ間に確実な有意差が存在し、EDFグループは比較的音楽を愛好していることが見て取れます。

音楽の鑑賞方法ではABCグループは若い世代よりもCDやMD等に対する依存度が少なく、ラジオやTVをその対象とする傾向が強いことも判っています。

結論として、音楽の基礎能力が最も高いのはDグループで昭和30年代生まれ人たちと言うことになり、しかも皮肉なことに教師からの影響は最も低い世代です。すべての調査項目で劣っていたのはFグループつまり、昭和50年代生まれであることがわかりました。このDグループというのは昭和43年度の、Fグループは平成元年度の学習指導要領による教育を受けた世代であることは興味深い結果です。

Gグループというのがあれば現在の指導要領の教育を受けている世代(昭和の最後生まれ)ということになりますが、「学力低下」の象徴のような世代であるように言われますが、実際に大学で教えていてそれを感じます。

小学生の頃「創って表現する」という教師の指導のない教育を受けた彼(女)らは音と音楽を区別することやドレミの機能すら学習していません。旋律やハーモニーがうまく掴めない彼(女)らは、ひたすら「強烈なビート」や「癒しの詩」しか受け入れられない貧弱な個性を形成されてしまったようです。